三題噺『・会社員　・ノート　・ゴミ処理場』

「僕らは会社員ですよ」
　一瞬だってこちらを見ることなくそう言うと、先輩はメガネを中指で上げ直し、手に収まるくらいの小さなノートに何かをメモを取っていく。
「……会社員ですか……？」
「そうですよ」
　私が首を傾げながら、まるで納得いっていない顔を浮かべていることに気付いているのかいないのか、先輩は表情を一切変えることなくノートにメモを取り続けている。
　まいっか。と先輩から目線を離し、赤く染まった地面に視線を滑らせていくと、元の状態がわからないくらい顔を変形させられた男の死体が１つ。
　不快な感覚が胸の辺りに詰まり、その不快感を吐き出すように息を吐くと、私はまた首を傾げる。
　用済みになった人間を『ゴミ処理場』と呼ばれる『死体処理場』に捨てる。なんてとんでもない業務をしている自分達が会社員？
　私は未だ隣でメモを取り続ける先輩に、もう一度質問を投げた。
「私達ほんとに会社員ですか？」
「そうですよ」
「……頑なだな～」